大阪毎日新聞　昭和八年九月十二日

文樂史に時代劃して "紋下"は解消の運命へ

津太夫と古靱太夫の縺れは水に流れ けふは暗雲ぬぐふ會見

江戸の末期、近松の人情が一世を風靡したころ大阪に繚亂と唄き謳つた人形淨瑠璃のもつ藝術と榮譽と權勢を、一身に集めた「紋下」が、つひに時代の潮流に抗し得ず、わづかに人形淨瑠璃の傳說と余命を傳へて殘る「文樂座」から消えて行き、或はこれを契機として人形淨瑠璃史上からも永久に消滅するのではないかと見られる事態に立いたつた——

今春二月大阪文樂座の「紋下」津太夫と、自他ともに次の「紋下」を許した古靱太夫との間に「紋下」讓渡をめぐる紛糾が持ち上り古靱太夫、津太夫との同座を拒絕したことから傳統の殼中に根强いいがみ合ひはいつ果つべしともなくつゞけられ、藝術を愛する

心ある

一部の人達のひんしゅくを買つてゐたが、白井松竹社長、多田專務、福井常務はこの藝術を毒する不祥事を非常に遺憾とし、津、古靱はもとより、文樂座に牢固たる勢力を持つ土佐太夫、三味線友次郎らの間を種々斡旋調停につとめた結果、最近津、古靱の兩氏は白井氏の熱誠を容れて白紙一任と折れたので、土佐、友次郎らを加へた文樂の首腦者らは、白井松竹社長の九州旅行から歸るのを待つて、十二日午後南區笠屋町三六の白井氏邸に集まり、一切の行がゝりを水に

流して

十月から八ケ月ぶりに津、古靱の兩横綱が仲よく文樂の舞台に出でファンを喜ばせることになつた、そしてこの機會に津太夫はサッパリ紋下を辭し久しく紛糾の波に弄ばれた「紋下」は、一時白井松竹社長の手元に預かられることにきまつたが、同氏の意向では——現在の紋下には、すでに江戸時代人形淨瑠璃花やかなりしころの實權はなく有名無實の虛位となり下つてゐるにも拘らず、わづらはしい紛糾が

虛位を

めぐつて將來も同じように繰返されることは至藝の將來に暗影を投ずるものであるから、再び「紋下」が白井氏の手元から誰かに渡されることなく、事實上人形淨瑠璃史から消えて行く運命をもつのではないかと見られてゐる

新統制に期待

福井松竹常務談

「紋下」は文樂座全座員の推薦によつて藝も人格も最も立派な人がならねばならぬ、今のように年齡順とか先輩順によつてきめられるのは不穩當です、若いものでも人形淨瑠璃を背負つて立つだけの藝が出來、人格が立派ならばドン〳〵紋下になればよいと私は思つてゐる、それが出來ないと私は思つてゐる、それが却つてよろしい、津太夫が「紋下」を辭したあと後輩者は恐らく實現せず、文樂は津、古靱、土佐の三頭制によつてうまく統制をとつて行くでせう、さうなればお互にいやな感情を超越して勵み合ひ却つてよい結果を見るだらうと期待してゐます

虛位を守る必要はない

某消息通曰く

「紋下」は義太夫藝術の最高位を表象する極めて至純なものでなければならぬにも拘らず津太夫はこれを古靱に讓ると輕々に口約し古靱はまた津が口約に背いて紋下を讓らぬと憤慨するなど全く「紋下」の何たるかを解しないものだ、現在の如く「紋下」が全然昔のおもかげを失つた以上何を苦しんで虛位を守る必要があらう、新しい酒は新しい革囊に盛らねばならぬ、文樂座もこの際斷然「紋下」を廢し新時代に適する機關なり組織なりを作つた方が却て賢明かも知れぬ